

## ソシュールにおける、聴く主体と 社会的なるものの関係について

高 木 敬 生

はじめに

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの理論は言語学の枠内のみにとどまらず、多様な分野に影響を与え、現在では構造主義という大きな思想的潮流の源のひとりに数えられている。日本におけるソシュール研究は丸山圭三郎が中心となって1980年代にひとつのピークを迎えた。丸山のソシュール研究はゴデルやエングラールによって切り開かれたソシュール文献学を踏まえたものであり、ソシュール自身によるテキストに拠ってソシュールを理解しようとするゴデルやエングラールの研究の発展と言えるであろう。周知のごとくソシュールの『一般言語学講義』はバイイとセシユエが、ソシュールの一般言語学講義に参加した学生のノートを基に編集し死後出版されたのであるが、その内容が真にソシュールの言葉を反映しているかどうかについて疑問を抱いたのがゴデルとエングラールであり、彼らは学生ノートにさかのぼって『講義』を文献学的に批判した。立川健二によれば丸山の仕事はその批判をさらに「ラディカルに」押し進め、「『講義』のソシュールはまったくの「虚像」にすぎないということをあきらかにし、原資料のテキスト・クリティックにもとづくソシュールの「実像」を描きだした<sup>1)</sup>のである。丸山によるソシュールの「実像」は言語学者ソシュールを思想家ソシュールとして読むということにつながった。

丸山圭三郎がこの書物〔『ソシュールの思想』1981〕の全編をつうじて、さらにそれ以後の著作をつうじて訴えてきたのは、ソシュールとは「言語学者」ではなく、「思想家」であるということ、

それもマルクス、フロイト、ニーチェ、フッサールとともに、十九世紀までの認識論的枠組みそのものの組み替えをおこなったラディカルな「思想家」だということである<sup>2)</sup>。

こうした背景のもと日本のソシユール研究はゴデルやエングラウの文献的成果を活用する上で当時の先端に位置していたといわれる。丸山の『ソシユールの思想』は専門書としては珍しく広い読者を得た。しかしながら、そこからのソシユール理論の理解には、それが浸透すると同時にそれに対する批判も現れた。たとえば言語の変化について、「ラング＝パロールの弁証法」すなわち個人のパロールにおける創造的なラングの使用がラング自体に変革をもたらすという一見すると正しいように思われるものも、実際に厳密にソシユールの理論に則して考えるならば、矛盾をはらんでいるということになる。

本稿ではこの「ラング＝パロールの弁証法」を足掛かりに、まずはソシユールにおいてパロールの個人的性質に対置されがちなラング概念の社会的なるものがどのようなものか、その内実を探る。従来ラングージュにおける個人性はもっぱらパロールの側に割り当てられてきたが、ラングにおける個人性もまた問題にされる可能性があるのである。ここでは丸山の弟子のひとりである末永朱胤の個人ラング論を基に、ソシユール理論においては、ラングが社会的なるものとしてしか考慮されないことを指摘する。そしてその社会的なるものとしてのラングがソシユール理論においてラングの動態を考察することを困難にしていることを指摘したい。次にそのラングの社会性が、ソシユール理論においては、「話す主体」の存在様態と不可分なものであることを指摘したい。

論述の順序については、まずは個人ラングとは何かについて末永(1988)を中心に確認していくことになる。ここでは末永が個人ラングという概念を導入する過程から、ソシユール理論において個人的ラングという概念が「隠蔽」され、ラング概念とは社会的なものでしかあり得ないような構成になっていることが明らかになるだろう。その「隠蔽」の理由を探るために、つづいて社会的ラングの社会性とは何かをドロシェフスキーによる社会学の概念との比較を基礎として考察し、最後にそこから引き出されるソシユールにおける「社会的なるもの」の特性を立川(1986)が展開したソシユールのラング理論における主体の議論と

関連させて明らかにしていきたい。この過程によってソーシャルのラング概念が何故に社会的なものでしかあり得ないのか、個人ラングが「隠蔽」された理由が明らかになることと思われる。

### ソーシャルにおける個人ラングの位置について ——個人ラングは存在し得ないのか

個人ラングについて、ソーシャル理論におけるその位相の重要性を指摘した末永の論を参照しつつ確認していこう。個人ラングとはどのような要請のもと導入される概念であろうか。それについて考察するにはまず丸山の〈ラング＝パロールの弁証法〉を確認する必要がある。しかしそれにはラングとパロールとの性質について確認しておくべきである。

ソーシャルはまずもって言語現象の総体をランゲージュとし、それをそのまま考察することの困難を次のように述べている。

言語活動 [ランゲージュ] は、ぜんたいとして見れば、多様であり混質的である；いくつもの領域にまたがり、同時に物理的、生理的、かつ心的であり、なおまた個人的領域にも社会的領域にもぞくする；それは人間事象のどの部類にも収めることができない、その単位を引きだすすべを知らぬからである<sup>3)</sup>。

このランゲージュからラングを引き出すためにソーシャルが導入する装置が「パロールの回路」である。この回路は言語活動における「個人的行為」にあたとされ、話者Aの口から聴者Bの耳への言語記号の伝達を図式化したものである。それによれば、話者Aの脳内において概念と聴覚像が結びつき言語記号が想起される（心的過程）と、口腔から音声として発され（生理的過程）、音波として空間を通じ（物理的過程）、Bに聴取される（生理的過程）。Bにおいてその聴覚像が概念と結びつくこと（心的過程）により回路は完成する。この過程が繰り返されることによってコミュニケーションが成立しているのである。この回路を考察するに、ソーシャルが「社会的事実」として着目する点が心的過程である。「おなじ概念と結合したおなじ記号を再生する」ためには近似的な値としての記号、平均値が必要であり、それをまずソーシャルは

「社会的事実」と呼んでいる。そして心的過程のうちでも「遂行的側面」すなわち話者の立場は個人的なものである（「遂行が大衆によってなされることは絶対はない」<sup>4)</sup>）ためにパロールに区分し、「受容的側面」すなわち聴者の立場において社会的結晶化がなされるものとする。したがってランゲージュのうちラングとパロールとが区別されるのである。それはすなわち次のものを分離する。

言語 [ラング] を言 [パロール] から切りはなすことによって、同時に 1. 社会的なものを、個人的なものから、2. 本質的なものを、副次的であり・多かれ少なかれ偶然的なものから、切りはなす<sup>5)</sup>。

ここからラングは社会的<sup>6)</sup>でありパロールは個人的であるというそれぞれの性質が対置されていることがわかる。この両者の関係についてソシュールは次のように述べている。

およそ言語において通時論的なものは、言を通じてのみそうである。あらゆる変化の萌芽が見出されるのは言のなかである：どの変化も、慣用のなかに入るまえに、まずある数の個人によって切りだされたのである<sup>7)</sup>。

「通時論的なもの」すなわち言語の歴史的変遷はパロールの内にのみ見いだされ、そして言語変化は個人によるパロールから始まるということが述べられている。そして「言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない；そして進化現象はすべてその根源を個人の区域のうちにもつ」<sup>8)</sup> ため、ラングに変化をもたらすものはパロールであると読み取ることができるだろう。このことから丸山はラングとパロールの弁証法的関係を導き出すのである。

すべての言語上の革新は、パロールによってのみ可能となり、パロールにおいて試みられずにラングに入るものはなく、あらゆる発展の現象は個人の領域にその源を有するというこの図式は、ラングによって規制されるパロールと、逆にパロールによって変革されるラングという弁証法を示唆している<sup>9)</sup>。

以上が「ラング＝パロールの弁証法」の概要である。

ラングは社会的でありパロールは個人的であるが故にこの弁証法が成り立つと確認したのだが、しかしながら、じつはソシュールの一般言語学第一回講義を受けた学生のノートにはパロールが社会的でラングが個人的であるとする記述が残っている。

この二つの領域 [=ラングとパロール] のうち、パロールの領域はより社会的であり、他方（ラングの領域）はより完全に個人的である。ラングは個人の貯蔵所である。そしてラング、つまり頭、に含まれる全ては個人的なのである<sup>10)</sup>。

これはラングが個人の脳内にあるという意味で個人的であり、対してパロールはディスクールによる意思伝達という他者を前提とした社会的活動を指して言われているため社会的なのである。つまりソシュールにおける社会的／個人的の区別はラング／パロールに対応させるべきではなく、実際はラングもパロールも「両義性に開かれている」と考えられるのである。末永は次のようにまとめている。

[ソシュールにおいて] パロールが社会的なのはディスクールという社会的活動だからであり、それが個人的なのは「個人の思想に基づいたラングというコードの個人的行使」だからである。また、ラングが社会的なのは、それが「社会契約」であり、「社会生活を通じてのみ容認される」からであり、個人的とは「個人の頭脳に寄託された貯蔵庫」だからである<sup>11)</sup>。

ここから末永は、ラング＝パロールの弁証法が「一見個人による制度変革の可能性に道が開かれているように思われる」<sup>12)</sup> もの、実際には成立し得ないということを明らかにした。

社会生活を通じて容認され個人の頭脳に寄託されたラングは、この時すでに社会契約となっている。「個人は誰でも自分のうちに、あのラングという社会的産物をもっている。」つまり、集団のサンクションを経ることにより、ラングは社会的ラングとして“聖化”

されている。パロールの社会的活動の中で、「同胞とのコミュニケーション」を保証するコードへと制度化されているのである。したがって、個人の頭脳に見出される“個人的ラング”はつねにすでに社会的なのであり、ソシユールのラング概念における社会的／個人的の両義性は、こうした抽象化したラング、コミュニケーション言語の一義性へと閉じている<sup>13)</sup>。

つまりソシユールにおいては個人に見出されるラング自体がそもそも社会的なラングであり、それは個人的ラングという考え方が介入し得ないほどに根本的に社会的なのである。したがってパロールによるラングの変革とは、個人的（個人の頭脳に見出される）ラングすなわち社会的ラングによるラングの変革ということになり、つまりはラングによるラングの変革というトートロジーに陥っているのだ。

しかし、本当にラングには個人という位相が介入する余地はないのであろうか。末永の答えは「ある」であった。そしてソシユールによって「隠蔽」された、ラングの個人的位相（個人ラング）から社会的位相（社会的ラング）への変革の場こそがスタティックで物的なラングというとらえ方に変化というダイナミックな側面を導入する鍵となることを指摘した。

それならば、ソシユールの個人頭脳にあるという意味での個人ラングではない、末永的個人ラングとはいかなるものであろうか。以下、引き続き末永の論を参照していきたい。

### 個人ラングとは何か——末永の理論による

末永は丸山圭三郎によるラングの6つのカテゴリーを下地にその原理性／事実性の位相差に基づいてラング概念を3つに区分する。すなわち原理ラング、共同体ラング、個人ラングの3つである。

原理ラングとは「記号学の原理である差異の体系としてのラング」とされる。これは言語一般に限らずあらゆる記号体系に一般的な原理としてのラングを指す。すなわち純粋な抽象であると考えられ、原理性のもっとも高いラングである。共同体ラングは「諸言語の原理としてのラングであるとともに、[……]すべてのレベルの共同体の内部で共有さ

れる固有の言語までを適用対象とする原理を指す<sup>14)</sup>ものである。原理的でありながら実際の諸言語に適用される場合は具体性を持つという意味で原理ラングより事実性が高いと考えられる。それでは三位相の中で最も事実性の高い位相である個人ラングはどのように設定されるのか。そもそも個人ラングとは設定可能な位相なのか。

まず共同体ラングのはらむ背理から否定的に個人ラングの可能性は指摘される。すなわちその背理とは共同体ラングが存在するのであれば、同一共同体の成員はみな同じラングを用いているということであるが、しかしそもそも言語記号は体系外に絶対的な基準を持たない以上それ自体による同一性の証明は不可能であり、またコミュニケーションの成立にしても末永によれば「事後的には主体間の対話の場でお互いの言表が了解されるであろう。そしてラングとはこのように事後的に見出されるものであり、しかもその都度でしかない<sup>15)</sup>」という理由で共同体ラングの成員間における同一性が検証されるのは永遠に対話の事後のみであり、それは共同体ラング共有を検証することの永遠の先延ばしを意味する。すなわち方法論的に共同体ラングは検証不可能なのであって、それは「消極的に」個人ラングの可能性を意味する。それでは“積極的”な個人ラングの可能性とはいかにして示されるのか。

末永は、前項におけるソシユール理論からの帰結（ラングは社会的でしかない）に反し、個人ラングの可能性を示している。その過程をみよう。その考察は「パロールを通じてラングが寄託される歴史性」と「社会的／個人的の規定」との二点からなる。第一に、「パロールを通じてラングが寄託される歴史性」による共同体ラングの自己同一性の否定である。ソシユール理論では「ラングとは個人がそれまでにパロールにおいて経験した差異の集積であり、いわば語る主体の個人史にほかならない<sup>16)</sup>」のであり、個人史である以上は各人がそれぞれ全く同じものを経験するという可能性は限りなくゼロである。それはすなわち同一のラングが生じ得ないことを述べているに等しい。つまり個々人のラングには偏差が生じるはずなのである。第二に、「社会的／個人的の規定」による共同体ラングの否定である。すなわちそれは社会的ラングが抽象であるということに由来する。ソシユールによればラングとは言語活動によって結ばれた個々人の間に成立した一種の平均であり、その個々人は「おなじ概念と結合したおなじ記号を再生する」のではあるが、それは

「精密にはない」のであって「近似的」なものである<sup>17)</sup>。したがって平均である社会的ラングに対してここでもまた個人間での偏差が暗に示されていると考えられるのである。またソーシャルにおいては個人もすでに定冠詞単数の総称的個人となっていることが指摘される。つまりソーシャル理論の個人とは抽象された平均的ラングを備えた個人であり、個人自体が抽象なのである。

ソーシャルが出発する個人ははじめから単数であり、それはサンプル＝モデルとしてすでに全体化された個人である。抽象化された個人から出発し、ラングという抽象を導き出しているソーシャルのこの操作はいわばトートロジーである<sup>18)</sup>。

したがって、末永によれば実際には個々人のラングが全く同じであることの方が想定され得ないのであってそこにソーシャル理論における飛躍が存在することも明らかとされたのである。しかしソーシャルがラングにおける個人的なるものが理論上想定され得ないような社会的なラングを想定したのはなぜだったのか。その原因はソーシャルにおける話す主体の設定にあると考えられるのである。それについては後段で立川の議論を基に論じるつもりである。

とはいえ、ここまでソーシャルのラング理論についての個人と社会の対立についてのみ見て、社会性の内実についてはいまだ不明瞭なままである。したがって、ソーシャルのラングの社会性についてよく知られた指摘に合わせて確認しておこう。

### ラングの社会性について

ここまで末永の説に沿ってラングにおける個人的側面を考察してきたが、対して社会的な側面はあまり触れなかった。そこでここでは、ラングの社会性についてもう少し詳細に確認しておこう。

ソーシャルのラング概念の社会的性格についてよく知られた指摘が社会学者デュルケームの「社会的事実」概念との類似性である。その点についてドロシェフスキーはこう言う。



すなわちそれは1. 表象である、2. 個人の意識の外にある表象である、3. 強制力を授けられ、その強制力のおかげで個々人に強要されるような表象である、4. その基体 substrat かつ支え support として集合意識をもつ表象である。したがってこれが、言語をデュルケームの意味で「社会的事実」と形容するときに、人が言語にあるとみなす性質である<sup>19)</sup>。

この箇条書きされた4つの性質をもう少し具体的に言語に則して説明しよう。1. 表象であることは確認するまでもない。それでは「個人の意識の外にある」とはいかなることか。デュルケームは社会的事実がなにがしかの個人に由来しない集団的な事象であることを指摘する。例えば、デュルケームは「社会的生を個人的諸性質からの単純な結果のように表すべきではない」といい、その理由として「それら [個人的諸性質] はむしろそれ [=社会的生] から生じる<sup>20)</sup>」と述べている。つまり個人という要素の除外である。2もまたそのように理解することができるだろう。さらに3. 強制力についてはソシュールも次のように述べている。

言語はひとつの社会制度であるから、集団を支配する規定に似たものによって律せられていることは、アプリアリに考えることができよう。さて社会法則にはすべて二つの根本的特質がある：それは命令的であり、かつ一般的である；それは押しつけられ、あらゆるばあいに掂げられる、むろん時と所になんらかの限界はあるが<sup>21)</sup>。

つまり言語は制度として、それが通用する集団に一般的になるよう拡大しかつ命令的に押し付けられるということになる。そして4. 使用集団の必要性という論点もソシュールに認められることである。

言語が存在するためには話す大衆 (masse parlante) が必要である。いついかなる時にも、そして外見とはうらはらに、言語は社会的事実の外には存在しない、なぜならそれは記号学的現象であるから<sup>22)</sup>。

確かにソシュールのラングは話す大衆に支えられることでデュルケームの意味での社会性を備えているように思える<sup>23)</sup>。それではこの表象の基

体かつ支えとなる集合意識・話す大衆とは何か。先に見たソシユールのラング理論においてそれは総称的な個人であると考えることができよう。これらの個人の特徴、つまり話す主体とは何かについて立川の議論を基に確認しよう。

### ソシユールのラング理論における主体＝聴く主体

立川健二はその著書『《力》の思想家ソシユール』の中で、ソシユール言語学が共時的言語体系の在り処とする〈語る主体<sup>24)</sup>〉が、実は〈聴く主体〉であることを指摘した。立川によれば、ソシユールの言語分析の手法が常に、ある与えられた言表の分析からなるのであって、話し手の立場にはない<sup>25)</sup>。

この分析を立川は主観的分析と呼ぶ。この主観的分析においては、言表のなかから聴き手が聴き取ることのできるものは表意的単位しかないということ、また自分の所有するラングしか聴き分けられないということの二点が前提となっている。たとえば、言表をなす音連鎖は、単なる音調としてみれば連続体なのだから、それを切り分ける方法は無限にあるはずなのだが、聴き手はそれを意味のある言表として聴き取ろうとするとき、当該の言語が定める表意的単位にしか切り分けられないのだ。

〈聴く主体〉が聴く——了解する——のは、他人が発する言表の〈意味〉であり、この〈意味〉に関与しない差異は聴きとることができないということである。かれの意識はつねに〈意味〉の聴取に集中しており、ことばのなかでも〈意味〉にかかわりのないさまざまな差異——発音の微妙なずれ、声の高低・強弱、あるいは罗兰・バルトのいう「声の肌ざわり」(grain de la voix)——は意識しないし、意識することもできない<sup>26)</sup>。

ここで表意的単位とは何かを考えてみよう。それが実体的、あるいは実定的 (positif) な何かではないということは言うまでもないだろう。というのもソシユールの定義からすれば、「言語のうちには差異しかなく、実定的辞項は無い<sup>27)</sup>」のだ。ということは、〈語る主体＝聴く主体〉が意識できるのは差異だけなのだ。ここには言語記号の恣意性が関わっ

ている。ソシユールは次のように述べる。

どの音声映像 [=シニフィアン] にせよ、それが言うことを引き受けたもの [=シニフィエ] に応じること [の] 他にまさるものは一つもない以上、言語の一断片は、つきつめてみれば、それと残余のものとの不一致以外のなにものにもけっしてもとづきえないということは、アプリオリにさえ明白である。恣意性と差異的とは、二つの相関的性質である<sup>28)</sup>。

いうまでもなく言語記号のシニフィアンとシニフィエは恣意的であるのだからその絆は無動機なものである。それではその絆は何に基いて単位を成すのか。それが「残余のものとの不一致」すなわち差異である。言語記号は恣意的<sup>29)</sup> であるがゆえに、同じ言語体系を構成し、共存しているほかの記号との差異においてしか価値をもてないのである。したがってこの差異そのものを有意味単位としてとらえることができるだろう。こうした考察から、立川は共時態を「表意的差異の戯れ」からなるとし、それを言語学の具体的対象だとしている。

あるいは、その差異そのものが有意味単位なのだと考えてもよい。すると、語る主体 [=聴く主体] の意識に問うことで得られる言語学の対象としての言語状態 = 共時態とは、《意味》と《差異》によって織りなされているということができらるだろう<sup>30)</sup>。

語る主体 [=聴く主体] の意識に問うという方法、すなわち「主観的分析」ないし「現時的分析」によって獲得される〈共時態〉という対象を構成するのは、差異であり、表意的単位であり、究極的には「表意的差異の戯れ」(jeu des différences significatives) である。つまり、言語学における「現実」、すなわち具体的な対象 = 単位とは、結局のところ意味をになう差異、もしくは意味の区別にやくだつ差異にほかならないのである<sup>31)</sup>。

以上、ソシユールの〈語る主体〉とは実は〈聴く主体〉なのであり、ソシユール言語学の共時的対象としての体系すなわち「表意的差異の戯

れ」は、聴く主体の意識を基準とした「主観的分析」によって得られる、という立川の理論を確認した。

立川は次に、聴く主体とはどのレベルでの存在なのかという問いに着手する。言い換えれば、「その主体が個人的存在か、集団的存在か」という問いである。

### 集合的存在としての聴く主体

この問題について、立川は「語る主体」という語に用いられる定冠詞に着目している。

もちろん、「語る主体」のこの複数形の用法には例外がないわけではないが、それでも八割ほどの比率でソシユールが総称の意味をあらわす定冠詞複数形をつかっているということには、意味がないとはいえない。つまり、かれが、言語学の一時的対象を獲得するさに問題にしているのは、それぞれ個別的なズレをふくむ個々人の意識ではなく、ある言語を話す個人たちの総体、すなわち集団の意識ではないだろうか<sup>32)</sup>。

ソシユールが「語る主体」=聴く主体について何かを言う場合、ほとんどの場合で総称の意味の定冠詞 les 付きで語を用いているが故に聴く主体が集合的なものとして考えられるのだ。この点については先にみたドロシエフスキーの集合意識であるとの指摘とも一致するといえる。

立川はさらにここから論を発展させ、ソシユールのラングが存在するためには語る大衆 (masse parlante) が必要であること<sup>33)</sup> と、静態言語学すなわち共時言語学の対象たる体系を認識する集合意識 (conscience collective) が個人の意識においてもその「イマージュ (似姿)」を呈している<sup>34)</sup> という第三回講義の行から、両者がソシユール理論においては同質的であることを見抜くのだ。

この一節 [III C 362, 1660] では、集団の意識と個人の意識が対立するどころか、むしろ同質的なものであることが示唆されている。「個人の意識」は、「集合意識」のイマージュ (似姿) を呈している

というのだから<sup>35)</sup>。

立川は、彼の見出した「個人の意識が集団の意識と基本的に一致するというこの〔ソーシャルの〕認識<sup>36)</sup>」を、言語の均質性の要因とすることで、ソーシャルのラング概念の社会性が、〈聴く〉という行為そのものの性質に基づいているということを明らかにしたと言えるだろう。

ようするに、〈語る〉というのは、私ひとりのことばを語るということなのだ。それにたいして、〈聴く〉というのは、私以外の（あるいは私をふくめて）すべての不特定の他者たちのことばを理解するという営為なのである。だから、個人は、種々雑多な他人たちのパロールを理解するためには、そこにおいて自己同一的なもの、すなわち共同体の全成員によって暗黙裡に承認されている有意味単位を分析することが必要なのだ。つまり〈語る〉という行為がつねに〈差異〉の体験であるのにたいして、〈聴く〉という行為は、〈同一性＝社会性〉の体験なのである<sup>37)</sup>。

〈聴く主体〉とは〈聴く〉という行為を行う限り、常に共同体の立場で表意的差異のみを意識するのであり、これはすなわち、〈聴く〉という行為が「社会集団に媒介された社会的行為たらざるをえない<sup>38)</sup>」ということなのである。つまりは、聴く主体の意識こそが、それが集団的であれ個人的であれ、言語の社会性を規定しているのだ。言い換えれば、有意味として聴き取れる＝理解できるものは社会的であり、聴き取れない＝理解できないものは社会的ではないのだと考えられる。

したがってソーシャル理論においては、ラングは社会的である、そして社会的でしかあり得ないのである。なぜなら、ラング理論において前提とされる主体がすでに抽象された集合的な聴き手、聴く主体だからである。

## まとめ

以上、末永の論からラング＝パロールの弁証法について検討すると、ソーシャルがラングに「個人的」という形容詞を用いても、それは結局、

社会的ラングを個人の頭脳に保持しているという意味においてでしかないことが確認され、ソシユール理論においてはラングもパロールもともに社会的ラングの枠組みを脱することができない、すなわち社会的ラングしか存在し得ないことが指摘された。その閉塞を脱するためには末永の「個人ラング」という位相を導入することが可能性としてあり得たのだが、ソシユールはその位相を「隠蔽」していた。ソシユールはなぜ個人ラングを「隠蔽」したのか、すなわち社会的ラングのみしかない原因がどこにあるのか。

続いてその問題について、ラングの社会性がいかなるものかをドロシェフスキーの指摘から確認し、ラングが基体・支えとする集合意識としての話す主体を検討することとした。そして立川によるソシユールのラング理論の主体が聴く主体でありかつそれはすでに集合的な主体を前提とした主体であることが確認された。このことによりソシユールには社会的ラングしかあり得ないということの理由が、言語活動の主体に起因することが明らかとなった。つまり集団的な聴く主体が基体かつ支えとして君臨するラング理論においては、ラングとは常に社会的かつ静的な共同体ラングとして受け取られ、変化という動的な相は扱いきれないということである。

ソシユール理論の中においてはラングはそれ自体閉じた体系になっていることが避けられないのである。しかしながら、ソシユールのラング理論を補完する形でのバイイ、バンヴェニスト、オースティンらディスクール理論<sup>39)</sup>をパロールの位置に代入することでソシユールのこの閉塞した体系を脱却する手がかりももたらされていることは指摘しておくべきであろう。

## 注

- 1) 立川 (1986) p.19
- 2) 同上 p.20
- 3) Saussure (1972) p.21
- 4) 同上 p.26
- 5) 同上 p.26
- 6) ここでの社会的とは、個人的という性質がラングの本質には関連しない(副次的な)多様さ(偶発性)を持つことに対して、集団的な同一性をもつということによって理解される。

- 7) Saussure (1972) pp136-137
- 8) 同上 p.235
- 9) 丸山 (1981) p.85
- 10) Saussure (1996) p.65 (訳は著者による)
- 11) 末永 (1988) pp.9-10
- 12) 同上 p.7
- 13) 同上 p.10
- 14) 同上 p.22
- 15) 同上 p.25
- 16) 同上 p.26
- 17) cf.Saussure (1972) p.25
- 18) 末永 (1988) p.30
- 19) Doroszewski, (1969 [1933]) p.104
- 20) Durkheim (1991 [1930]) p.341
- 21) Saussure (1972) p.128
- 22) 同上 p.110
- 23) しかしながら、このことをデュルケームからソシュールへの影響と結論付けることはできない。ソシュールは 1890 年代にすでに社会的事実という語を用いており、それはデュルケームが『社会学的方法の基準』を世に出すのと同様かそれよりも早かったと思われる。
- 24) ソシュールは、〈語る主体〉の意識に問うという主観的分析を用いて言語学の具体的対象としての共時的ラングを獲得した。
- 25) 「ところで、ソシュールのいう「語る主体」なるものは、このような能動的作用 [[諸単位の「結合」] や「新たなパロールの「創造」]] を知らず、ただ他人の送ってくる言表のなかに表意的単位 = 差異を感じ (ressentir) たり、意識し (avoir conscience) たりすることしかない。したがって、かれが言語理論の出発点にすえているのは、じつは〈語る主体〉ではなく、あくまでも〈聴く主体〉だということがわかるのである。」(立川 (1986) pp.82-83)
 

この聴く主体という観点を、さらにディスクールの理論と合わせてソシュールの理論がパロールの理論と表裏一体をなしている指摘したのが末永である。cf. 末永赤胤 (1998)
- 26) 立川 (1986) p.88
- 27) *CLG(E)*, p.270, III C 403, 1940, cf. *CLG*, p.166
- 28) Saussure (1972) p.165
- 29) 周知のように、恣意性の内実は聴覚映像は概念に対して自然的な結びつきを持たないということである。*CLG(E)*, p.155, III C 282, 1143-1144 「それ [記号] は概念との関係において、その記号のうちにはその概念にそれ

を個別的に結びつけるものが何もないという意味で、恣意的である」。cf. *CLG*, p.101

- 30) 立川 (1986) p.75
- 31) 同上、pp.76-77
- 32) 同上、p.98
- 33) cf. *CLG(E)*, p.172, III C 324, 1285、*CLG*, p.112
- 34) cf. *CLG(E)*, p.227, III C 362, 1660、*CLG*, p.140
- 35) 立川 (1986) p.99
- 36) 同上、p.100
- 37) 同上、p.100
- 38) 同上、p.103
- 39) cf. 注 19 及び末永 (1998、2005〈第2部〉、2011)

### 参考文献

- Doroszewski, Witold, 1969 [1933], « Quelques remarques sur les rapports de la sociologie et de la linguistique : É. Durkheim et F. de Saussure », in *Essais sur le langage*, Paris; Minuit (pp.97-109)
- Durkheim, Émile, 1895, *Les règles de la méthode sociologique*, 7e éd., Paris; Librairie Félix Algan
- 1991 [1930], *De la division du travail social*, 2e éd., Paris; Quadrige/PUF
- 丸山圭三郎, 1981 『ソシュールの思想』、岩波書店
- Saussure, Ferdinand de, 1972 小林英夫訳、『一般言語学講義』、岩波書店  
(2005) *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bailly et Albert Séchehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Ed. critique préparée par Tullio de Mauro, postface de Louis-Jean Calvet, Paris, Payot)
- 1989 *Cours de linguistique générale, Ed. critique*, par Rudolf Engler, Repr. de l'éd. originale, T.1, Wiesbaden, Otto Harrassowitz
- 1996 *Premier cours de linguistique générale (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger: Saussure's first course of lectures on general linguistics (1907) from the notebooks of Albert Riedlinger*, French text edited by Eisuke Komatsu / English translation by George Wolf, Oxford, Pergamon)
- 末永朱胤, 1988 「ラング／パロール論の射程」、『中大仏文研究』no.20、中大仏文研究会、pp.1-50
- 1998、「遂行的なものとしてのラング：ソシュールの言語概念再考」『フランス語フランス文学研究』no.73、日本フランス語フランス文学会、pp.34-44
- 2011 「ソシュールの記号概念と聴き手の立場：記号の図の矢印につ



- いて」『ヨーロッパ文化研究』 no.30 (一之瀬正興教授退職記念号)、成城  
大学文芸学部 pp.79-97
- 高木敬生、2013 「ソーシャルとデュルケーム：言語と社会的事実」『Azur』  
no.14、成城大学フランス語フランス文化研究会 pp.21-40
- 立川健二、1986 『《力》の思想家ソーシャル』、風の薔薇